

【特別論考】

近代日本の留学生受入れ・交流史を顧みる

－『留学生は近代日本で何を学んだのか—医薬・園芸・デザイン・師範』（日本経済評論社、2018年3月）を出版して－

Recognizing the History of Exchange and Acceptance of International Students in Modern Japan: “What did the international students learn in modern Japan - medicine · horticulture · design · teacher education”

千葉大学国際教養学部 見城 悌治

KENJO Teiji

(College of Liberal Arts and Sciences, Chiba University)

キーワード：留学生史、中国留学生

1 近代日本の留学生受入れ・交流史を顧みる意義

現代日本で学んでいる留学生数は20万人を超え、さらに増え続けていることは周知の通りである。歴史を振り返ると、日本が留学生を受け入れた端緒は1881年の朝鮮留学生であった。また中国留学生の来日は1896年から始まり、日露戦争後には、戦前期で最大の1万人を越える学生が学んでいたとされる。

東アジア出身者を中心としたこれらの留日学生たちは、近代日本で何を学んでいったのか。一般的に言えば、西欧化を急速に進めていた日本で、その「西洋的学知」を吸収するためであった。しかしながら、20世紀に入ると、日本は周辺諸国と様々な軋轢を抱えていき、植民地支配や戦争という局面に至ってしまう。ただし、注目すべきは、こうした「友好的」と言い難い時代でも、アジアからの留学生は絶えることがなかったという事実である。

21世紀の留日学生の主体は、戦前期と同様にアジア留学生である。しかし、現在の東アジア諸国と日本の関係は、「政冷経熱」的な状態にある。そうした現実に照らすと、より困難な時期であった20世紀前半の日本で、アジア留学生が何を学んでいたのか、その成果を母国に如何に活かしていったのかを顧みることは、現在と過去を考える上で重要な素材になると考えられる。

歴史学を専門とする筆者が、日本経済評論社から発刊した拙著『留学生は近代日本で何を学んだの

か』では、医学薬学、園芸学、デザイン学、師範教育を学んでいた留学生に焦点を当てている。なぜこれらの分野を取り上げたのか。理由はきわめて簡単で、筆者が勤務する千葉大学の前身校にあたる戦前期の諸高等機関—千葉医学専門学校（千葉医科大学）、千葉高等園芸学校、東京高等工芸学校、千葉師範学校を研究対象としたためである。そのため、拙著は「千葉大学留学生史」のごとくにも見えるが、結果として、そこに留まらない、ある意味で普遍的な内容を示すことができたと考えている。その理由を、各論の概略を示しながら、説明していこう。

2 医学薬学を学んだ留学生たちとその特色

日露戦争後に中国留学生が増えたことは先に触れた。しかし多くの留学生は「速成教育」と言われた不十分な教育を受けるにとどまり、レベルの高い官立学校で学ぶことはほとんどできなかった。そうした状況を改善するため、1907年、清国政府は、日本側と協議し、官立学校5校に留学生特別受け入れ枠を設けることの認可を得た。すなわち、第一高等学校（現 東京大学教養学部）に65名、東京高等師範学校（現 筑波大学）に25名、東京高等工業学校（現 東京工業大学）40名、山口高等商業学校（現 山口大学経済学部）25名、そして、千葉医学専門学校（現 千葉大医学部・薬学部）に10名の留学生枠を設けたのである。これら総計165名の留学生は、清国側（学生の出身省政府）の経費負担によって、1908年から15年間、各校で学んでいくことになったのである。

この協定によって、医学・薬学の修学を希望する学生は、官立千葉医学専門学校（1923年から千葉医科大学）を中心に派遣されていく。そのため、中国に戻った元留日医薬学生の出身校は、同校が最も多かった（1930年のある調査では、医薬学関係者789名のうち、154名が千葉医大卒で、2位の長崎医大102名、3位の東京帝大医学部90名を引き離していた）。また、人数が多いだけでなく、その必然として、中国医学界の重鎮も輩出していくことになる（なお、筆者の集計によれば、千葉医専・医大に在籍した全留学生（1899～1947）は282名であり、そのうち中国籍の学生は221名と8割近くを占めていた）。つまり、千葉医専・医大に焦点を当てることによって、日本で医学薬学を学んだ中国留学生たちの動向や帰国後の諸活動の代表的部分を把握できると考えられるのである。

千葉で学んだ元留日医薬学生たちをめぐる特記事項を、いくつか紹介しておきたい。2000年に中国で発刊された『中国医学通史 近代巻』には、近代中国で発刊された西洋医学関連雑誌が400余りも紹介されている。第一号は、1880年にアメリカ人が編集し、広州市で発刊された雑誌とされるが、その6番目に、1907年千葉医学専門学校留学生が組織していた「中国医薬学会」が出した『医薬学報』が挙げられているのである（7番目も、金沢医学専門学校留学生が発刊した雑誌『衛生世界』であった）。

『医薬学報』の「創刊の辞」には、「ああ、二十世紀の曙光が、いま麗しく東にとどろく。本報はこの時機を利用し、我が医界勃興の先導となる。将来「中国医薬学会」の勢力は膨張し、後の医界巨匠

として、二十世紀に異彩を放つであろう（原文中国語）」のような留学生たちの力強い想いが記されていた。この雑誌には、千葉医専で講義された専門科目などの内容が中国語に翻訳された上で掲載されていたが、それが本国でも流通し、中国近代医学史の一ページを堂々と飾っていったことは驚きである。

このような「新しい近代医学」を修めた留日中国学生は帰国後、中医学（漢方医学）の影響が圧倒的であった中国社会において、日本での「学び」を伝えるための医学校を自ら創建していく。また、教職に就き、若い世代にそれを伝えていく。千葉のOBにおいては、とりわけ公衆衛生学分野で活躍した人士が多く、大学教員としてだけでなく、衛生行政にも積極的に関わっていったことが分かっている。

一方、千葉医専の留学生は、狭義の学問や医療技術以外にも、多くの事を学んだ旨の回想を残している。たとえば「千葉医専で学ぶ間、日本の学問の急速な進歩を日々実感していたが、それには日本人医学者が編纂した『独日医学事典』の役割がきわめて大きい事に気づいた。そのため、帰国後 28 年もかかったが、ようやく『英漢医学事典』を（1952 年に）発刊できた」とするOBがいる。苦勞して完成に至ったこの事典は、1983 年にも増訂版が出されるなど、今日でも基本文献として流通していることが確認できるのである。

また、別のOBは、千葉医大の教授に論文添削を受けた際、日本語の誤りだけでなく、論理の組み立て方までを懇切に教えてもらったことが、その後の研究者人生で、中国語のみならず、独語や英語で論文を書く時に大いに役立ったとの謝辞を残している。

仙台医学専門学校（現東北大学医学部）の留学生だった魯迅が、指導教員との思い出を書いた短編小説「藤野先生」（1926 年）は日中交流の佳話として良く知られている。そのなかに、藤野先生から受けた添削に、魯迅が当初不服の感を抱いた場面が描写されている。似たような事例は仙台医専だけでなく、千葉を含めた全国の学校で見られたはずである。

敢えて、の言い方となるが、仙台医専が魯迅と藤野先生という「点」の交流に留まったとするならば、多士済々の医学薬学人材を輩出した千葉医専・医大では（そして、他の多くの大学においても）、「線」から「面」へと広がっていく交流が生み出されていったことは改めて想起されてよいだろう。

3 園芸学を学んだ留学生とその特色

現在、「園芸学」を学部名として掲げている大学は千葉大学のみである。戦前期においても、その前身である千葉県立高等園芸学校（1909 年開校）が唯一の存在であった。同校は、蔬菜や果物、また花卉の主産地であった千葉で、中堅指導者・技術者を育てることを目的としていた。

他では学べなかった「園芸学」を修めた留学生の動向、帰国後の活動をまとめることは、留学生の多様な「学び」、「知」の受容や交流を知るために重要な意味を持つと考えられる。

同校に在籍していた留学生は45名とさほど多くなかったが、帰国後、重要な役割を果たした人物を輩出する。1915年の孫文死後、南京市に中山陵（孫文の墓）およびその周囲の広大な陵園を新たに造営する事は、中華民国の国家的事業であった。そして、この陵園制作を任せられ、それを果たした人物は千葉高等園芸の元留学生であった。また、現在「ツツジの城」と称えられる美しいキャンパスを持つ台湾大学の緑化整備に貢献した人物も、中国・河北省出身ながら、台湾大学園芸系教授に就いたOBの仕事であった。

千葉高芸は、近代日本で最も早く「造園学」を講じていた高等教育機関であり、初期段階で教員と学生が協働して造ったフランス式庭園、イタリア式庭園が現在も残っている。そうした学内環境が、これら留学生の帰国後の活躍に活かされたと考えるのは、あながち間違いではないだろう。



写真 1：千葉高等園芸学校「フランス式（沈床）庭園」（1920年代）

4 デザイン学を学んだ留学生たちとその特色

戦前日本で「図案（デザイン）」専攻を設置していた官立の高等教育機関は、東京美術学校（1896年図案科設置）、東京工業学校（1899年工業図案科、1914年廃止）、京都高等工芸学校（1902年図案科設置）、そして東京高等工芸学校（現千葉大学工学部）の4校だけだった。とりわけ1922年に開校した東京高等工芸は、世界大戦後に大衆化が急速に進むなかで、新しい工芸分野（デザインほか）を担う中堅人材を育成する学校であった。

同校の留学生の総数は41名であったが、きわめて多彩な地域から学生が来ていた点に特色がある。すなわち、医専や高等園芸が、東アジアからの留学生のみであったのに対し、同校の「印刷工芸科」はアフガニスタン、ビルマなど9つの国・地域の留学生が、「写真」専攻にはコロンビア、ロシアを含む6つの国・地域の留学生が、それぞれ在籍していた。新しい学問領域を講じていた東京高等工芸には、世界各地から留学生がやってくるのであった。

さらに興味深いのは、「工芸図案科」でデザインを専攻した留学生 14 名のうち 13 名が中国留学生であったことである。なぜ、中国留学生が東京高等工芸の図案科に集中したのだろうか。

この理由を説明することは比較的容易である。すなわち、1920 年代の中国では、上海などを中心に都市化また文化の大衆化が広がりつつあり、商業デザインを専門的に学びたいという志向が高まっていた。一方、日本で図案科を置いていた諸学校の中で、東京美術学校は、純粋芸術との関連が、また京都高等工芸は伝統的工芸との関連が強かった。それに対し、東京高等工芸は「時代」が求める最先端のデザイン学を提供していたため、中国留学生が同校に殺到していったのだと思われる。

そして、東京高等工芸で学んだ留学生は、帰国後、美術系大学で美術や図案の教育を担当し、あるいは、新たに創設された図案（デザイン）科の教授になる人が少なくなかった。医学薬学がある意味で普遍的絶対不可欠な近代知であるとすれば、デザイン学は日々新しく生起し変転していく近代知と言える。そうした分野においても、留学生たちは日本での学びを活かしていったのである。

5 師範教育を学んだ留学生たちとその特色

全国の道府県に原則的に一校だけ設置されていた師範学校は、小学生等を教える日本人教師を養成するための教育機関であった。したがって留学生が、そこで学ぶ必然性は一切なかった。

しかるに、「満州国」（1932 年「建国」）が、自国の若者を日本語教育人材として養成する必要に迫られたため、1935 年から日本の師範学校に留学生派遣を開始してくる。派遣先は、繁華とされた東京や大阪を避け、「人情純朴にして風俗淳美、質実剛健なる地方」と見なされた東北・北信越を中心とした十数校に限定されたが、千葉師範も 1937 年から受け入れを始める。そして、結果論ではあるが、千葉師範は、関東地方唯一の受入れ校となり、かつ全国的にも受入れ人数が多い学校となった（在籍者の総計は 11 名）。つまり、千葉師範の事例を通じ、「満州国」留学生受入れの特色を概観することができるのである。

とは言え、戦争が激化していく時代でもあり、記録はあまり残っていない。さらにまた、日本の敗戦、「満州国」崩壊によって、帰国後の留学生がどのような人生を歩んだかも不明である。

「満州国留日学生」に焦点を当てた別の研究（浜口裕子『満洲国留日学生の日中関係史—満洲事変・日中戦争から戦後民間外交へ』勁草書房、2015 年）によれば、戦時下で「国家的使命」を帯び、日本で学んでいた若者たちが、帰国後、相当な苦労を重ねながらも、「日本語力」などを活かし、戦後の日中交流に貢献したこと、すなわち、戦時下での「学び」が、戦後の平時に繋がり、結果として、それを活かした事例があった事が紹介されている。

戦時下の留日学生、とりわけ「満州国」留学生のみならず、中華民国学生についても、その評価については、軽々に論じられない難しさがある。しかしながら、いずれにしても来たるべき「未来」を信じ、学び続けていた留日学生たちの存在を忘れてはならないだろう。

6 辛亥革命と留日学生の貢献

拙著では、以上の各論に加え、「辛亥革命と千葉医学専門学校留学生の動向」および「千葉医大留学生の日本見学旅行」をめぐる特論も掲載している。

本稿では、前者についてのみを簡単に紹介しておきたい。すなわち、1911年に辛亥革命が勃発した際、千葉医専には



写真2：辛亥革命「記念碑」落成式（1912年）

40数名の清国留学生在籍していたが、赤十字隊を結成し、救命医療、人道支援のため、大陸に渡ることを決意した。その話を聞いた千葉医専の校長は、「赤十字は世界文明精神に適うもので、我々も理想とするものだ」と讃え、学校が一丸となり、緊急医療講座の開催、義捐金の拠出、壮行会などを行った。大陸に渡り、各地で活動を展開した留学生たちは、革命の帰趨が見えてきた半年後、ほとんど復学し、卒業に必要な医学薬学の科目をすべて修め、それを帰国後活かしていくことになる。

千葉大学医学部の本館前には、1912年に留学生たちが建てた「記念碑」が現在も残っている。その碑には、医学校の教員や同級生から熱烈な支援があったため、所期の目的を達することができたことへの感謝が綴られている。この碑文は、近代日本における留学生と在籍校の教員・学生との交流および支援を記録するきわめて貴重な歴史遺産なのである。



写真3：現在の千葉大学医学部に立つ「記念碑」

7 近代日本と留日学生の「知的連鎖」、互恵的関係性

近代日本における留学生は、東アジアを中心に相当数に上る。その主勢力であった中国に限定してみても、歴史に名前を刻した人物は、魯迅、黄興、蒋介石、周恩来など枚挙にいとまない。その一方で、「名」は残さずとも、様々な分野で活躍貢献した「元留学生」もまた膨大な数にのぼる。彼らは、留日時代、キャンパスの内外で様々な知的交流や人間関係の構築を進めてきたはずである。

拙著は、千葉大学の前身校にあたる諸高等教育機関を主たる素材とし、戦前戦中期の日本で学んで

いた留学生たちの在学中の動向や帰国後の活動、また人的な交流や知的連鎖が、同時代はもとより、現在にまで影響を持ち続けていることの一端を明らかにしてきた。

筆者がこの研究に取り組んだ理由の一つは、近代日本にやってきた留学生の「歴史」を顧みることにより、互恵的関係を含めた多様な交流のありようを明らかにすること、またそれによって、現在の周辺諸国との不全な関係に一石を投じることができれば、と考えたためである。

戦前戦中期の留學生史を語ることには、植民地支配や戦争の歴史が重なるため、憚りたい気持ちがどこかに生ずることも否定できない。しかし、それを直視しなければ「未来」を切り開いていくこともできないであろう。

それらを考えるヒントとなるような逸話を二つ紹介し、本稿を閉じたいと思う。

一つは、留日中国学生の中でも著名な一人である郭沫若をめぐる逸話である。文学・歴史学など様々な分野に足跡を残した郭は、1914年に来日し、日本語を修得した後、岡山の第六高等学校、九州帝国大学医学部で学ぶ。帰国後は、政治活動に参加したが、蒋介石と対立し、1928年から十年余り、千葉県市川で亡命生活を送った経験も持っている。

その郭が、戦争終結から十年経った1955年12月、国交が未回復状態であった日本に、民間交流開始の第一陣とされる「中国科学代表团」の団長としてやってきた。母校の九州大学をはじめ、各地を歴訪した郭は、千葉県市川の旧居および千葉大学医学部も訪問している。郭は医学部を見学した後、「日本の学者たちが真面目に自分の研究をしているので、私たちも大きな励ましを受け、さらに頑張らなければならないと思う」とのコメントを残している。さらに、「医道乃仁術 仁者必有寿 我亦曾学医 未仁心自咎（医道はすなわち仁術であり、仁は必ず幸せを与える。私もまたかつて医を学んでいたが、いまだ仁心でないため、自身を咎めている）」という詩も残している。

これらの発言や詩は、戦前の日本で学び、生活し、また日本との戦争に参加し、戦後は新中国のリーダーとなるという数奇な経験を積んだ郭が、日中の学術文化交流（留学を含む）の重要性を示した、きわめて重厚でかつ希望を含んだ内容ではないだろうか。

二つ目は、少し角度を変えた逸話である。『千葉県野菜園芸発達史』（1985年）には、「中国留學生が1917年に持ってきた小玉スイカを、千葉高等園芸学校教員が校内で試作することに成功した。教員は、そのスイカに、留學生の名前（繆嘉祥）の一文字を取り、「嘉宝」と命名した。それが戦後の小玉スイカ発達に大きな役割を果たした」という旨が記されている。そして、驚くことに、この「嘉宝スイカ」は気軽に家庭菜園で作れる品種として、現在も流通しているのだ。つまり、その由来自体は忘れられてしまったものの、留學生と教員の共同営為の痕跡である「嘉宝」の名前は、21世紀まで残り続けているのである。

「留學生は近代日本で何を学んだのか」をテーマとした拙著は、「留學生側の学び」に焦点を当てている。しかし、本来的には「日本側の学び」も折り込んだ双方向的、互恵的交流も視野に入れて、展

開していくことが望ましいだろう。その意味で、園芸学校の教員が「嘉祥くんが持って来てくれた良い西瓜だから『嘉宝』と名付け、世間に広めよう」とした事象は、きわめてユニークな事例として特記しておきたい。

おそらくこのような事例は他にもあったと想像される。しかし、現在まで認知され続けている事は、氷山の一角にすぎない。中国の若者を中心にした留学生の日本経験の多くは、確実に存在しながらも、今や可視化できなくなった事象が圧倒的に多いだろう。その意味で、近代日本にやってきた留学生たちの喜怒哀楽を、関係性が良かった時期も悪かった時期も併せ検討すること、それらを歴史の深層から拾いあげ、「日本側の学び」も含め、様々な角度から分析、叙述していくこと、それらの必要を強く感じている。

30万人もの留学生を受け入れることを目標としている現代日本社会にとっても、それらの作業は、汲むべき様々な問題を提起してくれるのではないだろうか。